

## 理想の職業とは

「キュレーターとは、基本的に美術館において美術資料の管理と研究に携わり、専門知識を持って展覧会の開催等、多岐にわたる業務を担当する専門職を指し、日本語における学芸員にほぼ相当する。」

確かに辞書で調べればキュレーターがどのような仕事であるか理解することができる。しかしながら、どんな人達がこの仕事に携わっているのかここからは何も分からない。

今回は自身がキュレーターでありながら、森美術館の館長を務める南條史生さんのお話を伺った。ゆっくりと力強い声をした南條さんが一つ一つの言葉を丁寧に選び、質問に答えるその姿からは、数多くの相手と対話を重ねてきたという経験が伺える。職業をテーマに南條さんのキュレーターとしての顔、館長としての顔を学生の視点から書いていく。

南條さんは少し特殊な経歴を持っている。慶應義塾大学の経済学部を卒業し、一度銀行に就職したものの、銀行で働く自分に違和感を覚え、退職。昔からアートに興味があったことから、再度、慶應義塾大学の文学部哲学科美学美術史学専攻に入学した。文学部在学中はカナダへ交換留学で二年ほど滞在している。

「美術の仕事についての予測は立てられないけれど、知識はもう一回、二年くらいかけて手に入れて、その卒業生になって、ある程度の基礎はできるのではないかなって。」と当時について語った。

しかし、文科系・アート系で就職先があるのかという不安はあったという。

「美術やっても無駄ですよ。就職先なんてありませんよ。」

文学部での入学試験において、当時の面接官はこのように彼を脅した。

しかし蓋を開けてみると、日本はその後、美術館ブームを経験し、学芸員を志した多くの同窓生は美術館への就職が決まったという。

「あの先生が脅しているのはいいのだけれど。実はちょっと嘘だったなって。」と笑って付け加えた。

南條さんはカナダでの留学中、アート関係の仕事に就きたいと漠然と考えてはいたが、特にどのような職業が良いかは定まっていなかった。

「キュレーターという言葉が最近よく聞くけれども、キュレーターなんて言葉は当時全く知らなかった。」

具体的な職業は定まっていなかったものの、将来自分がどのようなライフスタイルを送りたいかは分かっていた。南條さんにとって、物を書くことが理想のライフスタイルであった。

カナダ留学から帰国すると旅行雑誌のジャーナリストというアルバイトを始めた。そこ

で、文章力を鍛えたおかげで、後に雑誌「美術手帳」の展評を一年間担当し、美術展のカタログや解説を書く時に、おおいに助かった。

### カナダ留学から得たサバイバル能力

カナダ留学の経験から、彼はその後の人生で重要になる能力を意識し始めたという。

「社会に出て行った時に生き残る。いわば、サバイバル能力をいかに身につけるか。そういうことが大事。どんな仕事でも同じだよ。」

知らない社会に飛び込んだら、日本人であるというアイデンティティー以外は何もない。海外では、慶應大学の学生であると言っても、殆どの人は慶應がどんな大学かを知らない。このサバイバル能力は色々な環境に身を置くことで身に付くという。

「自分はこのようなことが出来て、こういうことが好きで、このような方向性を持つ人間である。ということをしちんと伝えることが大事。それがきちんと出来ていると、逆にどの職業でも生き延びることができる。」と南條さんは語った。

### 館長としての顔

2002年に森美術館の副館長を経て、南條さんが館長になったのは、2006年11月である。それ以降、キュレーティングだけではなく、館長としての仕事もこなしている。森美術館の顔として、美術館を運営するために必要なことは何でもこなすという。

「社交に近い部分もあるし、展覧会を作るという専門家としての実務、経営というマネジメントへの配慮、あと広報の対応（取材を受ける）なんかもするね。」

来日したフランス大統領のご案内、運営資金の調達、そして展覧会の制作など、その内容は多岐にわたる。イギリスのテート美術館といった海外の美術館の館長と交流することもある。この他にも時間が許せば、若いアーティストを訪問して、話し合うこともする。

館長には美術館の顔としての責任が伴う。そのため、時には美術展示に関する批判とも向き合わなくてはならない。サバイバル能力はこのような時に発揮されるという。

会田誠の展示について女性団体から抗議を受けた時も、南條さんは数人の抗議団と面会し、議論することを拒まなかった。

「若い時にいろんな人と議論していたからそういう人と面と向かって議論しても負けないっていう自信があった。だから平気で会える。」

この時、もう一つ大切なのはリスクを読むことであるという。

「会って失敗し、僕の言葉が向こうのホームページやブログに引用されるリスクも考慮している。そういうリスクが生じた場合、收拾できるかどうかという事前の判断が重要になる。」

「これは現場を知っているというよりも、今までの体験を糧にして、先がどうなるか推測

できるかということなんだよね。」と南條さんは語った。

### 館長とキュレーターの両立

「キュレーションは面白いけれども、スタッフがやるときには、あんまり口を出さないようにはしているね。」キュレーションは非常に個人的な主観で行われる部分があるため、下手に口を出せないという。そのため、他人の行っているキュレーションに関しては、大きな方向づけにとどめる。しかし、自身が提案した企画の多くは、自らキュレーションしている。森美術館 10 周年を記念した展覧会、「LOVE 展:アートにみる愛のかたち」には、南條さんもキュレーターの一人として参加した。

### キュレーターと館長のそれぞれのやりがい

館長とキュレーターそれぞれの職業でどのような時にやりがいを感じるか、伺った。

「自分がやった展覧会が評価されるとか、自分が選んだ作家があとでもっと評価されること。だからまだ若くて、そんな評価が高くないけれども、自分がいいと思った作家を展覧会で紹介して、それが後で有名になると、やっぱり誇らしい感じだよ。」

館長については少し迷っていた。

「美術館がいきいきと活動していて、外の人が共感を持っていることが理想。展覧会で批判を受けても、一方で励ましてくれる人もいる。やっぱり批判も評価されたってことかな。」

展覧会の背景、制作者の意図、そして関わる人間が変わるため、一つ一つの展覧会は全部違う。毎回新しいことに向き合い、いくらでも改善の余地と可能性がある今の仕事には終わりはないという。

「だから多分老けない。この仕事は常にクリエイティブで居続けないといけないからね。」と最後に南條さんはこう締めくくった。